



Title	芒亭書屋談叢
Author(s)	芒亭
Citation	各務時報, 96
Issue Date	1937-05-10
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/77660
Type	column
File Information	A018_02_03all_Part31.pdf



[Instructions for use](#)

亭芒
書屋談叢

躑躅の花を観る

心なき人の足に踏みつけられる路傍の雜草は、何度踏みつけられても生命の根のある限り一生懸命に花を咲かせ、實を結ばうと努力して居る。何としても生きぬき、戦ひ抜いて行かうとするこゝんな生命の眞剣さには頭が下るではないか。生きてゐると言ふ事實は生きなければならぬと言ふ信仰や氣迫を含んで居るのだ。

遊戯會の慰勞清遊會で私等は映畫「萌え出づる力」を見た。映寫の巧みな技術によつて、植物がまるで動物の様に動いて居た。何か荳科植物の卷鬚が木の枝にまきつくところは蛇か何かの様に見えた。大地を割つて伸びて出る植物の芽や、瓶につめ込まれた蠶豆の發芽力が瓶を割つて膨らんで來るところ、生命の驚異が巧みに表現されて居た。

九二八ガーデンで鮎を食ひながらXとの對話――

「あんな映畫にも何かテーマがあるのかね」

「そりやあるだらうよ、第一君はあれを見てどう思つたんだ？だが君はつまり單に自然現象の科學的説明の平明な表現だけだと云ふのかね」

「僕はさう思ふね。そしてそれはそれ丈でも存在理由はあると思ふんだが」

「僕は科學的説明の平易な表現丈ではないと思ふねえ。あの映畫の中には明らかに一つの驚きが含まれて居るよ。科學には驚きはない筈なんだ。自然科學者が自然の現象の嚴肅さに其根強さに驚きを感じた時に、彼はしばらく知識の機械である事をやめて一個の人間となり、さうした詩人となつて居るんだ。自然科學者にも詩はあるはずなんだ。あの映畫は云はば自然科學者の詩なんだよ」

「さう云はればさうだ。去年だつたが日蝕の觀測をした天文學者達がコロナの美觀に思はず恍惚となつた様な事を聞いたが、あれもつまり君の云ふ自然科學者の詩人である瞬間と云ふ譯だねえ。」

「さうだ。數學者にだつて詩はあるんだ。或る數學者が自然數の中に於ける割り切れない數の配列に美の旋律を感じたと云つた事を僕は記憶して居る。疫癘の糞便の顯微鏡寫眞を見たが、まるでオランダサラサの様だ。前にも君に云つた事があるが、自然界に法則がある事その事が神秘だ。我々は平素常識や法則に慣れ過ぎ信じ過ぎて居るので驚きを忘れて居るが、常に新たな眼光で見れば、我々の身邊皆絶えず驚きでない者はない。驚く事の出来る間我々には進歩があるのだ。一生驚いて過した國木田獨歩はほんといふ偉大な詩人だつたと思ふ。詩は要するに驚きなんだよ。」

「躑躅の花が咲く頃となつた。躑躅の花は何としても今咲かなければならないのだ。襟を正して此の嚴肅なる自然の事實を觀よ。」

(芒亭)